

## 22. ウイルス・再生医科学研究所

( 分析項目Ⅰ 研究活動の状況 ..... 60 )

( 分析項目Ⅱ 研究成果の状況 ..... 61 )

## 分析項目 I 研究活動の状況

### 〔判定〕 特筆すべき高い質にある

#### 〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

ウイルス研究所と再生医科学研究所をウイルス・再生医科学研究所として組織統合し、ウイルス学と再生医科学の研究力強化に加え、新たな医科学研究組織体制の整備を進めている。6名の外部委員と所長、副所長によって構成される諮問会議を平成28年に設置し、ウイルス・再生医科学研究所の現状把握と将来計画の検証に加え、研究力向上ならびに環境整備について順次是正に取り組んでおり、若手研究者を積極的に採用し、若手教員に教員活動の自由度を付与している。

#### 〔優れた点〕

- 6名の外部委員と所長、副所長（3名）によって構成される諮問会議を平成28年に設置し、ウイルス・再生医科学研究所の現状把握と将来計画の検証に加え、研究力向上ならびに環境整備について順次是正に取り組んでいる。その結果、平成28年—令和元年度の間、新規教員として教授（40代）4名、准教授2名、特定准教授4名、講師2名、助教3名、特定助教2名を学外より新規雇用し、若手研究者の確保に努めている。また、平成30年度に35歳以下の教員を対象とした大学の若手重点戦略定員（1名）を申請し、採択された。平成31年度に配分され、若手教員を採用した。これに加え、35歳以下の教員を積極的に採用し、若手教員によって構成されるウイルス・再生医科学研究所のフロンティア研究プログラムに配属させ、教員活動の自由度を付与した。
- 平成28年度から平成31年度まで、海外著名出版社ならび一流国際誌に発表された著書ならびに論文の数は高度な水準を一貫して維持している。

#### 〔特色ある点〕

- 平成28年に、生命医科学分野の研究所であるウイルス研究所と再生医科学研究所が「ウイルス・再生医科学研究所」として組織統合し、それぞれの教員組織の見直しを行った。その結果、3研究部門と2研究センターに教員組織を改組した。

また、ウイルス・再生医科学研究所は、平成30年5月に、日本で初めて、ヒトES細胞株の樹立に成功したが、本邦における医療用ヒトES細胞の樹立・分配機能をさらに強化するため、学内で、ウイルス・再生医科学研究所の附属教育研究組織として「附属ヒトES細胞研究センター」を設置することが承認された。

既存の分野を組織再編し、専任教員（研究所より移籍准教授1名と特定講師1名）と兼任教員（教授2名）を配置し、令和2年4月より、施設を運用する。

- 科学研究費採択数は、平成28年度（新規36件と継続50件）、平成29年度（新規32件と継続52件）平成30年度（新規33件と継続55件）、科学研究費採択額は、平成28年度（483,210千円）、平成29年度（420,420千円）、平成30年度（518,570千円）、受託研究費採択額は、平成28年度（1,087,459千円）、平成29年度（582,196千円）、平成30年度（875,899千円）と推移し、年度間の増減はあるものの、比較的獲得外部資金は豊富である。他に、民間助成団体の研究費や民間との共同研究、奨学寄附金も獲得している。
- 旧研究所として平成20年度採択「再生医学・再生医療の先端融合的共同研究拠点」事業と平成21年度採択「ウイルス感染症・生命科学先端融合的共同研究拠点」に共同利用・共同研究拠点の認定を受け、再生医科学とウイルス研究、そして、生命科学研究所の場を全国の研究者に提供してきた。両拠点の共同利用研究の採択課題数は、平成28年度の40件から平成31年度の42件へ増加している。毎年度の国際シンポジウムへの開催ならびに参加、英語の研究報告書であるAnnual Reportを年1回発行するなど、共同研究の成果を発信している。平成29年度10月には第24回東アジア医科学国際シンポジウムと研究所開設記念シンポジウムを琵琶湖ホテルで開催した。現在、ウイルス・再生医科学研究所は、再生医科学ならびにウイルス研究の中核を担っている。原著論文発表はもちろん研究所ホームページを通じ常時、日本語と英語で積極的に情報発信を行っている。

## 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

**〔判定〕 高い質にある**

**〔判断理由〕**

学術的に卓越している研究業績、社会・経済・文化的に卓越している研究業績が、それぞれ、9件、2件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、高い質にあると判断した。

特に、「遺伝子発現振動の意義の解明」及び「エイズウイルス増殖抑制宿主因子の作用機序の解明」は、学術的に卓越している研究業績である。